

第 2 章 事前活動

春合宿

勉強会

防衛大学校訪問

春合宿

2005年5月3-5日 オリンピックセンター

5月3～5日、参加者の初顔合わせである春合宿が行われた。短期間ではあったが夏の本会議へ向けての本格的な第一歩となった。

1日目は、まず自己紹介やアイスブレイキングを行い、全員の顔と名前が一致したところで、会議についての詳しい説明を受けた。第56回のビデオ鑑賞会もあり、参加者のモチベーションが上がった。その後、初めて分科会ごとのミーティングをしたり、夜にはディスカッションタイムがあったりと、緊張もすっきりとけ、初日から充実したものとなった。

2日目は分科会報告や日本語・英語のディスカッションがあり、終始和やかなムードと活発な議論であった。夕方には、Alumni Receptionで多くのOB・OGにご臨席いただき、色々なお話をうかがうことができた。

3日目は今後の予定について説明を受けたり、参加者にも仕事が割り当てられたりと参加者たちが中心となって57回会議を開拓していく、という雰囲気が創られた。



ディベート講習会

2005年5月21日、28日 日米会話学院

講師：井上敏之氏

講師略歴

慶應大学経済学部卒業。(株)ミキモト、ユニバーサル葉タバコ会社で日代表を経て、95年に独立。(有)スピーチディベート研究所を設立し、現在に至る。コーチとしてだけでなく、自身もディベーターとして数多くのコンテストで優勝し、活躍中。第16回日米学生会議参加者。



勉強会内容

2週に渡り、英語ディベートの基本練習・実践講座を教えて頂いた。

1週目は論理的・効果的にプレゼンテーションを行う構成である、PREP(Point, Reason, Example, Point)と、OBC(Opening, Body, Conclusion)について教えていただき、二人組で実践した。その後、"Should Prime Minister Koizumi stop official visit to Yasukuni Shrine?"と"Should we abolish death Penalty?"という論題で即興ディベートを行った。2週目の「実践編」では、「単一民族国家は多民族国家より優れている」「日本にとってアメリカよりも中国と友好的な関係を築くべきである」の2つの論題に分かれ、2対2のディベート練習を行った。

多岐に渡る難しい論題のもとに、限られた時間の中で自分の言いたいことを論理的に第三者に伝えるのは非常に難しく、public speaking



と time management の重要性と困難さを痛感させられた。それだけではなく、日頃から知識のストックを増やしつつ自分の考えを持つ必要性、人前でプレゼンテーションを行う際に必要な度胸、第三者であるジャッジの視点を考える客観性などにも気付くことができた。本会議中に英語で討論する際や発言をする際にはより一層高度な技術が求められたが、この経験が大きな助けとなったのだった。英語ディベートの技術が公式な場で役に立つか、ということを変更して認識させられた。



防衛大学校見学

2005年6月10日 防衛大学校

朝9時過ぎ、小雨と朝露の立ち込めるなか、一同は防衛大学校に到着した。防衛大学校とはどのようなところなのかという疑問を抱きながら、防大校内へ案内された。最初に学校長からのご挨拶をいただき、謹聴する一同。そして学校の広報 VTR を見せていただき、一般の大学生とは 180 度異なる、陸上戦闘訓練や寮での厳しい掃除や点呼の風景を目の当たりにした。新しい発見に驚きを覚えながらも、次に防大の講義を受け、日米学生会議の為に特別に日米同盟と日本の防衛政策について講義をしていただき、ここでも新たな発見の連続であった。正午、普段から防大生が食事をする食堂で昼食をいただいた。皆、箸ではなく口を休める暇なしに、お互いの生活の違いなどを話し合い、交流が活発であった。



午後には実際に行われているゼミに数人のグループで聴講させていただいた。統率・国防・戦略・戦史等の科目は一般の大学には無い為、内容を理解するのが難しいものもあり、日米学生会議の参加者が議論でとまどった場面もあった。

そして最後は日米学生会議の分科会のトピックに基づいて防大生とのディスカッション。会議参加者たちは学術的なロジック、防大生は国防の見地から各々の意見をぶつけ合い有意義な討論を交わした。懇親会で更に交流を深めたあと、名残惜しくも一同はそれぞれ感じたことを胸に防衛大学校を後にした。



日米・日韓・日中学生会議合同勉強会

2005年6月12日 東京大学駒場キャンパス

6月12日、東京大学駒場キャンパスに40人近い学生が集まった。東アジアにおける地域内協力体制について、経済や政治と安全保障、文化という視点から議論を行った。10人程度のグループに分かれてのディスカッションを行った。特にテーマは決めず、グループのメンバーが興味を持っていることについて議論した。

ヨン様・韓流ブームなど「大衆文化は東アジア人としての共同意識とアイデンティティを上げるか？」から「朝鮮半島の南北統一」「沖縄の米軍基地」「東アジアでの相互安全保障と日米安保」までテーマは幅広く、韓国からの留学生のいわば“生の声”を参考にしながら、議論は進められた。また、「東アジア共同体のメリット」を FTA や労働力の移動から安全保障の面まで検討していくうちに、「戦後補償問題・歴史認識のギャップ」へと議論は進んだ。ハーバードで東アジアについて学んでいるアメリカ人の学生からは“外部の視点”を、中国で生まれ育った参加者からは“実際にはどのような雰囲気なのか”について教わった。

その後、軽食を食べながらの交流会へ。日本のインディーズロックと高円寺が好きなアメリカ人やロンドン大学でメディアについて学ぶ韓国人など、それぞれ異なるバックグラウンドを持つ参加者との交流は刺激に満ちたものだった。それぞれ違う団体に所属し、考え方や視点の違う学生達と交流できた。物事を様々な切り口から捉えることで、自分では気づかなかった視点を知り、問題への理解が深まった。



横浜山手中華学校訪問

2005年6月22日

学校法人 横浜山手中華学園 横浜山手中華学校

6月22日の午前中、横浜山手中華学校見学を行った。横浜山手中華学校は、全国に5校しかない中華学校の一つで、108年という長い歴史があり、現在では幼稚園から中学校まで約400人の生徒が在籍している。生徒の国籍は様々で、現在では華僑だけでなく、日本国籍を取得した華人、日本人、来日した中国人など、さまざまなバックグラウンドを持つ子供たちが、一緒に勉強している。

私たちは、まず校長先生にお話を伺い、それから授業を見学させて頂いた。横浜山手中華学校の教育の特色は、卒業生の全員が日本の学校に進学するので、統一的な中華文化と中国語の教育を行いつつ、高校受験を意識したカリキュラムを行っていることである。このような教育方針のもと、「素質教育」と「中国語、日本語のバイリンガル教育」を実践している。ここでいう素質教育とは、「能力開発教育」のようなもので、学校内の壁いっぱい飾られた、子供たちの作品や成果は、まさにこの教育の良い例であった。このようにすべての子供たちの作品を展示することで、人それぞれの違いを意識することし、自分と、相手を認めることを学びとって欲しいという校長先生の狙いがあった。また、バイリンガル教育では、「読む」「聞く」「話す」「書く」をバランスよく強化するために、中国の学校と協力して作ったオリジナル教科書を用いて学習していた。

実際に授業を見学して、先生たちと子供の距離の近さや、子供たちの授業中の積極的な態度が非常に印象的であった。また、「謝謝」に「对不起」、「ありがとう」に「どうも」と返答してくれた生徒は、言語の切り替えがとても自然で、アイデンティティについて考えさせられたと話す参加者もいた。

横須賀基地見学

2005年6月25日 米海軍横須賀基地

基地を肌で感じる

6月10日の防衛大学校見学で知りあった防大生の案内のもと、米海軍横須賀基地を見学した。横須賀は沖縄と同様に米軍の街として有名であるが、基地内には軍関連の施設はもちろん、隊員の日常生活に必要な店なども全て揃っていて、基地だけでも1つの街を形成している。

横須賀中央駅にて防大生と再会し、国道16号沿いの正門まで徒歩で移動した。入構手続きを終えベース内に踏み入れると全てがアメリカ風になり、まるで海外旅行に来たような錯覚を覚えた。興奮と多少の不安の中、岸まで歩くと停泊中の自衛隊の潜水艦に遭遇した。さらに進むと整備用のドッグや、レーダーが回転しているイージス艦、空母も見ることができた。この辺りでは日本の作業員も多数行き来していた。

その後は戦闘機を横目にしつつタクシーで移動し、ファーストフード店でアメリカ風の食事を楽しんだ。帰りは三笠口からベースを後にし、懇親会では防大生とともに米軍や自衛隊に関する議論から自分たちの将来のことまで語り合った。

防大生の計らいにより実現したこの日の見学は、私たちの米軍や基地に対する理解を深める非常に有意義な経験となった。



日米ユースフォーラム

2005年6月28日 日本外国記者クラブ

主催：日米協会（AJS） 共催：フルブライトプログラム、JASC ジャパン

テーマ：“Visions for change in U.S.-Japan relations in an evolving international environment :Perspectives from Japanese and American youth.” 「青年の期待する将来の日米関係」で、最初に4人のパネリストたちが、このテーマに対する各々の意見を発表した。

パネリスト

杉田道子（第57回日米学生会議実行委員長）

Linda Zhang（第57回日米学生会議実行委員）

乗竹亮治（第55回日米学生会議の実行委員長）

Daniel Kliman (Fulbright fellow)

4人のパネリストは日本・米国という枠組みを超えた多様なバックグラウンドを持っており、それぞれの経験や大学での専攻を活かし異なる観点からテーマを捉えていた。パネリストたちの意見は聞き手にも大きな刺激を与え、続いて行われた会場を交えての質疑応答の際、



文化から政治・経済にいたるまで様々な質問があがり盛況であった。「確かに、現在の日米関係は、昔とは比べ物にならない程良好である。しかしこれはあくまでも Better であって Best ではないのではないか。」という鋭い意見もあった。その後行われた懇親会では、ソプラノ歌手である高橋さやかさんとピアニストの山本千晶さんによって JASC ソングのお披露目があり、懇親会は終始和やかなムードで行われた。



大野和基氏勉強会

2005年7月16日 日米会話学院

講師：大野和基氏

講師略歴

国際ジャーナリスト。東京外大を卒業後、渡米し米コーネル大学で化学、ニューヨーク大学で基礎医学を学び、ジャーナリズムの世界へ。以降、医療・宗教・国際情勢・文化等、多岐にわたる分野で活躍。映画監督マイケル・ムーアや元CIA長官、ヘッジ・ファンドの帝王ジョージ・ソロスや政治学者サミュエル・ハンチントンへの単独インタビューを取るなど、海外でも活躍。



勉強会内容

9. 11 後に、150 人抜きでたった一人だけマイケル・ムーアにインタビューを取った方を招いての事前勉強会。今回は、従来の勉強会とは異なるソクラテス・メソッド形式で行なわれたため、ジャーナリズムの世界のお話以外に、大学生活等のアドバイスもうかがうことができた。いくつか大野氏の言葉を引用する。

『チャンスが目の前にいくら転がっていたとしても、それに気づくだけの能力が必要』

チャンスを掴むためには、準備が必要で、豊富な知識・教養を身につけておく必要があるという見解は、ジャーナリストとして大きくて困難な取材を取ることに外、日常でも大切である。その為にも様々なジャンルの本を濫読し、日ごろから多くの情報をインプットしておく必要がある。

『信頼が全て、一度裏切ると全てが終わりになる。そして正義感も欠かせない』

ジャーナリストという職業上、情報を入手する際、取材される側との信頼も去ることながら、情報を発信するジャーナリスト同士にも信頼は欠かせない。抜け駆けや、損得勘定で動く事は「裏切り」であり、それ以降、一切取材の協力をしてもらえないばかりか、仕事を回してもらえなくなる。また、社会の悪を正すためには、正義感が必要不可欠であり、賄賂等に目が眩み、これを失ってしまうと“在野”の視点からの良い記事が書けなくなってしまう。

『英語が出来ることは大きなアドバンテージ』

“英語が出来る”ということは、学術的な文法正しく堅いものから、スラングのように砕けた英語が話せるということである。ここまで英語を操ることが出来ると、取材が一段と取りやすくなり、更に相手に不信感を与えずに済む。仕事に来る、そして仕事を容易にこなすという2段階のアドバンテージを得ることは、英語がネイティブのように話せないと難しい。

一人のジャーナリストとして、強い信念を持ち仕事をされている大野氏からは、ここでは書きつくせないほどのジャーナリズムの世界についての知識と、今後の大学生活や日米学生会議へむけての励ましのお言葉を頂いた。

原孝氏勉強会「人を動かし、社会を動かすのは何か」

2005年7月23日 日米会話学院

講師略歴

慶応義塾大学法学部法律学科卒業。編集者・ジャーナリスト活動30年。同氏が編集した『授業を変えれば大学は変わる』が大きな反響を呼び、本書の主張に賛同した大学生を中心に「大学の授業を考える会」が結成され、その主宰者を務める。アメリカの大学事情にも詳しく、独自の大学改革案を提唱し、「大学改革論議の火付け役」の一人となる。また、若者たちと「何でも自由に喋る会」も開いている。大学教育学会会員。日本ペンクラブ会員。原孝事務所の代表。

勉強会内容

何かのプロジェクトをやるにしても、仕事をやるにしても、今求められるのは「人間力」である。では「人間力」とは何なのか？人間力とはすなわち、考え方や生き方や学歴が異なる人でも相互に受け入れあい、上手くやっていくことであると同時に、人をビジョンでインスパイアしていくことでもある。原先生は、ご自身の人生や実際に暴走族などの若者としゃべった経験を通じて、色々な人と話すことがいかに重要かと繰り返し言ってくだった。

自己開示の重要性に関しても語られた。自分の今までの生き立ち、そこで感じた悲しみや怒り、喜びや悔しさ、それらの感情を他人に対して、壁を作らずに他人とつながることの意義を教えてください。グループワークなどで人をひきつけるのは、こういう「人間力」である。

勉強会を通じ、今の日本の学歴社会の現状、「人間力」、学生生活の過ごし方など、様々なことに関して考えさせられた。

